

学生たちの観た日本

大学名： 清華大学

氏 名： 羅睿

テーマ： 1.国民性についての理解

2.集団帰属意識の強さ

日本の企業文化における大きな特徴としては、チームワークへの重視、各人が自身の職責を果たす、上下関係が明確というものがあるが、一般社員もしくは後輩社員は自発的に上司や先輩社員の言動を尊重していることから、伝統が安定的に継承されている。

私が思うに、こうした現象は日本の国民性における「恥」の文化に起因している。ベネディクトの著作『菊と刀』によると、日本人は比較的他人の見方を重視するため、企業の上司や先輩社員は自発的に自らの行為を律し、その他の社員にとっての悪い見本にならないようにする。そして部下や後輩社員は上司らの言動に従い、企業の文化や伝統が自らの部分で途絶えることを回避している。

だが、こうした企業文化から生じる国民性は国の発展においては諸刃の剣と成り得る。厳しく伝統を守ることは、必然的に杓子定規になり、発展を妨げボトルネックに陥りやすくなる。一方中国企業は伝統というものに拘らないことから革新の意識が高い。チームとしてのプランの制定においては摩擦が生まれやすいが、全体的に良好な革新力と効率を有している。

中国企業は革新や優勝劣敗を重視すると同時に適度に企業の伝統文化や制度を維持することで、総合的に発展をしていく必要がある。

大学名： 清華大学

氏 名： 杜秉霖

テーマ： 1.国民性についての理解

この数日間の感想を一言で表すと、日本は洗練した非利己主義者を育成している。

まず洗練について述べると、日本の人々は普段の生活において細部にとても配慮していて、こうした配慮が生活に洗練さをもたらしている。典型的な例としてはトイレが挙げられる。ハイテクというわけではないが、快適さを与えてくれる。日本の人々もまた生活管理が上手で、食事における栄養のバランスや日々の生活のスケジュールなどからはいずれも彼らの洗練された生活への追求が見て取れる。また洗練については「コンパクトで美しい」と言い換えることができる。

次いで非利己主義者について述べると、これは企業文化からその一部を見て取ることができる。京セラ、テルモ、住友商事、三井住友銀行などではいずれも社会や人類に貢献することを経営理念としている。こうした環境においては利他の考えや、社会や人類全体を対象とした事業がより重視される。日常生活においては日本の人々もまた他人の気持ちに常に配慮し、他者を尊重することに長けている。これもまた非利己主義の表れである。

洗練した非利己主義者は国や社会の安定を守り、社会の進歩を促進する中核的存在であり、日本の社会環境もこうした人々の成長に適している。この点についても私たちは検討し学んでいくべきだと思う。

大学名： 清華大学

氏 名： 劉繆詩棋

テーマ： 3.マナーのよさと思いやり

日本での数日間において、私は日本人の礼儀というものについて多くを考えさせられた。もちろん反論できない事実としては、日本人はとてまナーに気を付けていると同時に常に他人の気持ちに配慮しているという点がある。一つ例を挙げると、私たちを乗せた車の運転手が時折素晴らしい運転テクニックを披露した際、ガイドの中島さんは決まって私たちに運転手へ拍手をして感謝を伝えるようにしていた。中国において私はこれまで運転手に感謝をするということ考えたことすらなかった。中国人の観念では、運転手として雇いそれに見合った報酬を与えている場合、運転手の全てのサービスは当たり前のものである。だが日本では彼らのサービスはとて重要視されている。この点については、たとえ物質やサービスにおいて等価での交換がされる場合でも、私たちは報酬を与える際には相手を尊重する必要があると思った。

こうした意味から言えば、日本人の礼儀は職業を問わない。運転手であれ弁護士であれ、それぞれの仕事や努力は尊重されている。この点は私たちが学ぶべきである。

それと同時に私はまた、こうした礼儀は細やかであるとともに時に「煩わしいしきたり」にもなっていると思う。例えば、私たちが誰かとお別れをする際、相手側は姿が見えなくなるまで手を振る。初めは珍しく思ったが、その後は次第にこうした礼儀は本来の意義を失い、表面的なものになっているのではないかと思うようになった。マナーはもちろん重要だが、ひとたび形式化してしまえばその意味も変わってしまう。最も重要なのはマナーの背後にある情感であり、マナー自体ではないのである。

私は早稲田大学の学生達とこの問題について意見交換をしたが、彼らからも時にこうしたマナーが一種の習慣となり、本来の意味を持っていない場合があるとの回答があった。

また日本人がマナーを重視し常に他人に配慮することはもちろん良いことである。しかし日本人は常に「他人に迷惑をかけない」という原則を守っているため、多くの場合彼らは他人の見方を気にし過ぎる余り自分の欲求や本来の性格を押さえつけてしまう。

こうなると街全体は秩序があり調和がとれるが、皆が堅苦しくまた敏感になる。ある意味、人々は社会に巻き込まれ、盲目的に大勢の意見に合わせやすくなり、ひいては思想が硬直化し革新を疎かにする可能性も生まれる。

いずれにしても、マナーは美德であり、他人を思いやるのもまた美德であるが、何事も適度に、本来の自然な状態に戻ることで真の感情が伝わるのだと思う。

大学名： 清華大学

氏 名： 李安南

テーマ： 1.国民性についての理解

3.マナーのよさと思いやり

アメリカの作家ベネディクトが日本について記した著作『菊と刀』では、日本の民族的性格について「恥の文化」と定義しているが、これは中国の「やましいことがない」や欧米の「罪」といった思想とは多少異なり、三者の自身の行為への抑制力はそれぞれ他人、自分の価値観そして神の救いからもたらされている。よって日本人は非常に他人からの評価や見方を気にしており、またとて自制的である。例えば地下鉄では静かにする、エレベーターでは他人のためにボタンを押す、見知らぬ人にも会釈をするなど、私たちは今回の8日間で日本にはこうした民族的特性があることに

気付いた。そして仮にある人がその一般的な決まり事を守らなければ、彼らはその人を多少さげすむような目で見ることで行為を正そうとする。

マナーや思いやりについては本質的には一種の自製の表れであり、日中を比較すると日本企業と中国の国有企業にはいずれも終身雇用の制度があるが、日本では誇るべき経営手法となっているのに対して中国では企業の発展を阻害する要素となっている。このことから日本人と中国人の国民性の違いは、同一制度の異なる効果をもたらしている。よって私たちは他国における成功モデルを盲目的に導入してはならず、最も重要な部分を抜き取り、さらに自民族の性格に適した点を選び、自らの特徴を持つ制度を形成することで、リソースの効率的利用による高度成長を実現していく必要がある。

大学名： 清華大学

氏名： 盧宇芳

テーマ： 3.マナーのよさと思いやり

6.今後ますます中国でニーズが高まる技術

日本について印象深かった二つの点は日本の企業と文化である。まずマナーについて、日本のホテルや企業のスタッフのサービス態度はとても人当たりが良く、彼らが普段から口にするすみません、そして有難うございますといった言葉からは他人への尊重が感じられた。しかしその一方で、私たちが企業の見学を終えお別れをする際の、皆さんが互いの姿が見えなくなるまで手を振る状況には、礼に縛られていて真の名残惜しさが表れていないのではないかと思った。それでも日本人が中国人より礼儀正しいということについては、中国人として学んでいくべきだと感じた。

そして企業について、日本の多くの中小企業は100年以上の歴史があるが、中国企業の平均寿命は8年前後であり、この点は日本の文化的伝承に関係する以外にも匠の精神に関連している。その他、日本政府は企業への政策支援が充実していて、京セラの太陽光パネルにおいては十分な量の使用が認められているだけでなく、余った電力の提供も可能である。中国の多くの地域では日光の照射が充分であるため、太陽光パネルを活用すればきつと資源利用を大きく合理化できるが、この時企業が考えるのは自身のシェア独占と利益獲得であり、そのために政府は政策により問題を解決する必要があるため、結果的にこうした発電方法の発展速度を妨げることにつながる。

大学名： 中国人民大学

氏名： 趙元培

テーマ： 3.マナーのよさと思いやり

5.アニメなどのソフトパワー

私は日本人のマナーについてとても細やかだと思っている。企業訪問を終えお別れをする際、企業のスタッフが見送ってくれるのだが、彼らは姿が見えなくなるまで手を振ってお別れをする。初めはこうしたやり方に理解ができなかったのだが、ホストファミリーとのお別れの際、私は彼らの姿が見えなくなるまでずっと手を振ることで彼らとの別れを心から惜しんだ。私はこうした行為の背後には他者への心からの思いやりがあるのだと感じた。こうした事柄としては他にもエスカレーターで自発的に左側に立つことや、「すみません」や「有難うございます」といった言葉を口癖のように使うことなどがある。これらは国民の素養の表れであり、他人への配慮を真っ先に考え、「他人へ迷惑をかけない」ことを肝に銘じれば、その行為は自然とこのようになるのだと思った。

私はアニメ等の日本文化にとっても興味を持っていたため、今回日本においてそうした方面のソフトパワーを体験したいと思っていた。そして私は今回日本における二次元文化産業の発展の様子を直に体験し、さらにこうした文化の日本の若者への流行度合について理解を深めた。日本のアニメがなぜ中国でとても人気があるのか気になっていたが、今回私は日本のこうした文化の発展ぶりを知ることができた。

大学名： 中国人民大学

氏 名： 徐怡雯

テーマ： 2. 集団帰属意識の強さ

3. マナーのよさと思いやり

5. アニメなどのソフトパワー

日本では従業員は終身雇用制であるため、企業は従業員にとって終生尽くす場所である。対して中国の大部分の企業では、従業員が一つの企業で勤め上げることはほぼなく、多くの中国人従業員は自分に合った仕事が見つかるまで頻繁に転職を繰り返す。そのため日本企業に比べ、中国企業における集団意識は弱く、危機に直面した際の対応が難しくなっている。一方日本企業は従業員の帰属意識があるため、危機に直面した場合でも従業員は企業と共にそれを乗り越える。

日本と聞くと私の中ではまずアニメや二次元文化だった。幼少の頃に見たアニメでは、愛や感動、献身や情熱についてのストーリーがとても印象深かった。日本のアニメ文化はとても優れていて、その独特なタッチとストーリーで世界に日本の心を紹介している。アニメのストーリー自体は現実では実現できないかもしれないが、作品中のひたむきさは現実からアニメを通じて表現されることでより多くの人に伝えられている。

また日本に来てから、彼らのサービス意識の高さに驚かされた。マナーは日本の人々の心に刻まれたものであり幼少の頃から教育されている。中国と比べ、日本の人々にとって礼儀は必要なものであり、時に必ずしなければならぬものである。彼らはすべての物事についてそれがあって当然のものではないため、感謝の心を持たなければならないと考えている。よってこの社会におけるあらゆるものに対して礼儀をもって接しているのである。

日本の文化については、伝統の維持や未来への創造などまだ把握していない部分が沢山ある。よって、それらを知る次の機会を楽しみにしている。

大学名： 中国人民大学

氏 名： 胡心縁

テーマ： 1. 国民性についての理解

中国には古くから弁証法の哲学思想があるが、日本の「小と大による弁証」、「新と旧による弁証」には多くを考えさせられた。

ここ数日日本において最もよく耳にした言葉は「小さな面積」と「人類」であった。これは日本人が常に謙虚な心を持っているのかもしれないが、日本は自分たちの国土面積が小さいことを強調すると同時に絶えず視野を全世界に広げている。企業や大学の理念においてはそのシンプルさや個人の発展に拘ることなく、全人類の発展と進歩に目を向けている。私たちが訪れた各企業の本社に展示スペースがあり皆が見学できたり、また京都大学において多くの偉大な基礎科学研究者が生まれたりしているのもそのためである。地理的面積の小ささが変えようのないものなのであれ

ば、自分たちが見つめる世界と地球は彼らとその努力により勝ち得たものである。

私のホストファミリーの黒羽さんは毎回斬新なデザインの建物を見る度に私に「これは1980から90年代に建てられたもの」だと教えてくれたが、ここで不思議に思った。中国では新しいといえばここ数年で作られたものであり、10年以上経てばそれは古いものだと考えられる。日本社会は物事の「不変」を重んじており、彼らはいかなる時も本来の姿を維持しようとするが、その一方で常に時代の変化に注目し調整を行うことで適応し、古い良いものについては捨てることはせず、新しい変化に追い付いていく。これが彼らの維持そして「不変」である。

小と大、新と旧、一見矛盾するものだが、実は一つのものである。日本はこのように弱点と向き合い改善し、それと同時に初心を忘れない国民性を有している。これは私たちが学ぶべきものである。

大学名： 中国人民大

氏 名： 孫震

テーマ： 3.マナーのよさと思いやり

日本での交流において最も印象深かったのは、日本の人々のマナーの良さや他人への思いやりといったものであった。

日本を訪れる前から日本のマナーについての心構えはしていたのだが、それでも日本を訪れてからは彼らの礼儀やマナーには驚かされた。ここでは他人の生活の邪魔をすることはなく、また行き届いたサービスを提供している。例えば地下鉄に乗る際には混雑時の迷惑にならないようリュックを身体の前にかける。ホテルではエレベーターの出入りがしやすいようドアを押さえる。また挨拶の一言からも素晴らしいもてなしの心が感じられた。

私はかつて日中の民間におけるマナーについて比較をしたが、中国人的には残念な結果であった。その後、日本と同じとまではいかなくとも、他人の邪魔をせず、他人の迷惑にならない程度までは国や国民はマナー意識を高めるべきだと考えていたが、最近の状況から見ると、私たちはそれを実現できている。

日本の礼儀や規則に対する意識は幼いころから育まれている。どの国でもわがままな子どもはいるが、ホストファミリーとの交流を通じて私は、中国での幼い頃は緩く、大人になってから厳しくするのは異なり、日本では規則に対する意識が幼い頃から厳しく教えられていることを改めて感じ、この点を学ぶべきだと思った。

大学名： 中国人民大

氏 名： 耿思博

テーマ： 3.マナーのよさと思いやり

4.日中間の交流

今回訪日団として日本を訪れたことは、大学生期間における最も貴重な経験の一つとなるであろう。今回の訪問で最も印象深かったのは日本人のマナーの良さと思いやりであり、細やかな点から日中交流についての理解を深めたいと思う。

サービス業におけるマナーは最もしっかりしていた。また人に快適さと楽しさをもたらすマナー以上に、私たちは人当たりの良さや尊敬に満ちた日本人の民族的性格を感じることができた。いづれどこでも人当たりの良さは変わらず、常に他人を尊重し、そうした尊重を言動により示している。そうした尊重は性別、年齢、貧富、外見とは関係がなく、心からのものである。

マナーはまた個人的価値の表れである。文化において、人文主義は常に大衆に影響を及ぼしてきた重要な要素であり、人間性はヒューマンイズムすべてに貫かれている。マナーや他人への配慮の精神はヒューマンイズムから端を発し、人と人が互いに相手の価値を尊重する。差別、隔たり、違いなどはあってもマナーや思いやりは常に存在し、それは時空の変化により変わることはない。

日中の交流をマナーや互いへの思いやりに浸透させる中で、日中の訪問交流は一つの良い例である。毎回感謝の心で交流をし、両国の友好に携わる人々が互いに協力し今日まで継続してきた努力は、日中両国の人々の心を繋ぐ絆となっている。

日中の経済交流は従来から発展していて、経済や貿易においてはまた互いに依存する関係である。それと同時にグローバル化の情勢において、日中の交流もまた今まで以上に密接になっていくだろう。また文化交流においては、日中関係は文化の源を同じくするなど長い付き合いがあり、科学技術が発展していく中で、両国の文化もまたこれまで以上の関わりが生まれるであろう。

大学名： 对外経済貿易大学

氏 名： 關浚竹

テーマ： 3.マナーのよさと思いやり

今回の日本訪問において最も印象深かったのは日本人のマナーの良さと思いやりであった。

まず普段の態度について、エレベーターに出入りする際にエレベーター内の他の人に対して「すみません」と声を掛け、他人の通路を塞いでしまった場合にはお詫びをするなど彼らは常に他人に対して礼儀正しい。

こうした他人に対する心からの尊重はまた日本の様々な商品のデザインにも表れている。例えばビュッフェにおいてトレイを持った人が利用しやすいようにジューサーの傍に一時的にトレイを置く場所を設ける、トイレの便座が温かく、洗面所では温水が利用可能、レストランや商店を問わず店員がとても親切、ホテルの部屋の照明が利用者にとって最も便利で快適な場所に設置され、洗面所やトイレの照明がセンサー式で夜間の利用に便利、などである。

この他、日本企業の人類全体への関心も私的にとても印象深かった。例えば、京セラの社訓は「敬天愛人」で人類と社会の進歩に貢献している。テルモは「医療を通じて社会に貢献する」を企業理念とし、医療従事者の成長を後押しし、人類の生命と健康に貢献している。住友商事は常に変化を先取りして新たな価値を創造し、広く社会に貢献するグローバルな企業グループとなることを目標とするなど、これら私たちが見学した企業はいずれもマクロ的な発展目標を有しており、目先の利益にだけ拘ることはしていない。まさにこうした「先例となることを恐れない」企業がハイテク分野において貢献を続けることで人類の創出レベルが高まるのである。こうした企業の探求精神は時代の進歩を牽引している。

日本人は他人への思いやりによって、サービス業、ハイテク、医療産業などにおいて卓越した貢献をしている。これら日常生活におけるマナーからもたらされる様々な事柄は私たちが学び、そして総括すべきものであり、私にとって今回の訪日における最大の収穫でもある。

大学名： 对外経済貿易大学

氏 名： 葡潔星

テーマ： 4.日中間の交流

6.今後ますます中国でニーズが高まる技術

経済学を学ぶ学生である私は有難いことに今回の「走近日企・感受日本」に参加し、日本で進んだ技術を目にすると共に日本の人々の優しさやもてなしを体験することができた。

「人生、仕事の結果＝考え方×熱意×能力」、これは稲盛和夫氏が打ち出した著名な方程式である。京セラの見学の際、私は稲盛氏の経営理念と人生哲学に深く感銘を受けた。私の中で日本は先進国であり、その進んだ技術以外に企業文化への重視とチームワークの良さから日本企業の寿命は一般的にとっても長く、次世代への伝承を重視している。我が国が「大衆創新・万衆創業(大衆の起業・万人の革新)」の呼びかけの下で企業を強くするためには、日本企業の管理モデルや企業文化から学んでいくべきだと思う。

もちろんこれ以外にも、今回の訪日では日本の人々のマナーの良さや思いやりがとても印象深かった。私たちは日本語を話せないが、それでも彼らの穏やかな口調や常に見せる笑顔から、日本人はとても親近感がある民族だとわかった。今回私は米田さん夫婦のおもてなしにより異国の地で家庭の温もりを体感することができ、とても感謝している。日中両国の人々のこうした友好交流は、両国関係の健全な発展を後押ししていくものだと思う。

私は、思い出の詰まったこの日本を将来再び訪れたいと思う。また私たちに今回多くの収穫をもたらした訪日の旅という貴重な機会を提供してくださった中国日本商会や中日友好協会に感謝している。そして日中両国の友好がさらに深まることを願っている。

大学名： 对外経済貿易大学

氏 名： 王璐

テーマ： 2.集団帰属意識の強さ

3.マナーのよさと思いやり

日本での8日間はあっという間だったが収穫も多かった。その中で印象的だったのは以下の三つである。

一つめは京セラと社内のアメーバ経営で、アメーバ経営方式において企業組織は外部環境の変化に伴い形を変え、常に最良の状態を確保する。この点が四度の世界的経済危機を経ても同社が大きく発展している理由だと思う。

二つめは住友商事において楊方女史からお話のあった指導力の重要性で、一般の従業員であっても一定の指導力を身に付けることで自らの判断力を有し、さらに課題に直面した際にもグループに対し自らの貢献ができるのである。

三つめはホームステイの際に感じた日本人の優れた素養である。例えば礼儀正しさについては、私個人としては自分が得たものに対して常に感謝の気持ちを持つことだと思う。そして皆が感謝の気持ちを持つことでのみ未来の中国がより良くなると思う。

大学名： 对外経済貿易大学

氏 名： 朱宸賢

テーマ： 1.国民性についての理解

日本ではすべての事柄に両極端な属性が存在している。例えば洋服について、普段の東京の街中においては、スーツに身を包んだサラリーマン、少年らしさや活力に満ちた学生、お洒落ながらも奇抜なスタイルをした人といった

様々な人を見かける。またポスターについて、一部の店では世界で最も派手な色を使い切ろうとするかのように大胆な配色をし、さらにすべての文字を最大まで拡大しているが、その一方で、一部の店は一つの文字すらもその環境を乱すのではないかと思われるほどに質素である。そうした和風の清々しさや荒々しさはいかなる場所や物事においてもはっきりと目にすることができる。これは一種の矛盾ではあるが、日本社会の包容力と個性の表れと言える。私はこうした多様性が好きで、また多様化した調和も好きである。これは攻撃性を持たず、反対に私を感動させる「優しいもてなし」である。

もう一つ印象深かったのは日本人の物事に対する細やかさである。これについては多くの面から感じることができる。私たちが目にしたきれいで整然とした街角の背後には国民の「潔癖症」の如き衛生への重視があり、トイレにおける水音機能、テルモで見かけた中国と日本の国旗、彼らの時間への重視といったものすべてが日本という国の他の国と異なる特質を示している。そしてこの点については中国も実現することは可能である。私たちはすべてにおいて日本を見習う必要はないが、多くの中国人が日本のある特質に快適さ或いは楽しさを感じるとすれば、それは中国が学ぶべき部分であり、少なくとも国民の生活をより幸せに楽しくしてくれるものである。

大学名： 对外経済貿易大学

氏名： 曾欣

テーマ： 2. 集団帰属意識の強さ

日本滞在期間中は多くの企業を見学したが、日本企業の集団帰属意識が私にとって印象深かった。この集団帰属意識は二つの面から見て取ることができる。一つめは従業員の組織への帰属感で、離職率、欠勤率の低さ、組織市民行動の多さに表れている。二つめは企業の従業員に対する保護や育成の意識で、従業員の配置換えを意識的に行うことで企業内だけで従業員の研修や成長が行えるようにしている。

こうした状況の理由は二つあると思う。一つめは日本企業の終身雇用制度により従業員の企業への理解が深まり、企業利益と個人利益が結びつきやすくなっている。二つめは日本企業の使命や戦略は利益の最大化を目標としておらず(欧米企業と異なる)、同時にグループの従業員全体の生活や発展、目標の違いを踏まえ異なる対処方法をとっている(京セラのリストラなしなど)。

これらの背後からは日本の国民における「恥の文化」の影が見て取れる。他人からの評価を気にしているため、終身雇用制の企業においては大多数の人が自分の仕事を最大限全うするのである。

大学名： 北京語言大学

氏名： 艾力亜斯・肉孜

テーマ： 1. 国民性についての理解

3. マナーのよさと思いやり

日本に来る以前の私の日本への印象は経済が発達した強国というものであった。サービス業は世界をリードし、常に最高の接客を行うというのが彼らのモットーである。そしてこうした点は中国の目標でもある。

私は今回、日本の街中がとても清潔だということに気がついた。実は京都大学で学生と環境問題について討論した時から彼らの素養の高さを感じていた。討論において私が「もしごみの分類をせずにごみを捨てた場合、罰金などはあるのか？」と訊ねた際、彼らは長い時間考えていたが、その後私は彼ら自身分類をしないという経験がなく、どのよ

うに答えたらいいいのか分からなかったと知った。一国の国民の素養は大きな会議や外交に表れるのではなく、普段の我々自身に表れるのである。

アジアの経済の中心である日本は東アジアにおいて最初に先進国となった国であり、自身の経済を発展させると同時に国民の素養を高めていることは、それ自体すでに魅力的なシンボルであると言える。

今回日本を間近で観察し学ぶ機会が得られたことに感謝している。今回の活動は「井の中の蛙」が井戸を飛び出し新たな世界を発見したのと同じであった。

有難うございました。

大学名：北京語言大学

氏名：邱侶萍

テーマ：3.マナーのよさと思いやり

日本での数日間において印象深かったのは日本の人々の素養であった。

訪問先の日本企業の皆さんからはとても丁寧なもてなしを頂いたが、それ以上に印象的だったのは活動以外の時間において接した人々であった。

毎回ホテルに戻りエレベーターを使用する際、中に日本の人がいると彼らは決まってエレベーターのドアのボタンを押し、出入りがしやすいようにしてくれた。そして1階に到着すると周りの人に先を譲り、自分が最後にエレベーターを出ていた。

これは一見些細なことではあるが、こうした些細な部分ほど真実を伝えるものだと思う。彼らにとって他人を思いやることは骨の髄まで浸透している観念であるが、これは幼少の頃からの教育と大人が示す手本の賜物だと言える。

こうした点は現在の中国の若者が学ぶべきものだと思う。

大学名：北京語言大学

氏名：潘思妙

テーマ：5.アニメなどのソフトパワー

今現在中国人が誇れることは、中国が世界第2位のエコノミーとなり、政治的地位も上昇を続けていることであり、日本を訪れる前は私も中国はすでに台頭しており、モバイル決済、シェア自転車、B2Cなど多くの分野で従来の大国よりも秀でていたと思っていた。しかし、実際に日本を訪れいろいろな体験をしていくうちに、日中のソフトパワーの差を埋めるには数十年ひいては百年単位の時間がかかるのではないかと思うようになった。

ここで私が言うソフトパワーとは文化のことである。文化とは曖昧な概念ではあるが、文化的な国は世界中から人気があり、文化的な国での生活は心地良いものである。日本とはそのような文化的な国である。日本ではトイレは常に清潔で、清々しい香りすら漂っている。タクシーは光を反射するほどきれいに磨かれ、タクシーの運転手はパリッとしたスーツに身を纏っている。道路などの公共スペースではごみ箱を見かけることはほとんどなく、皆は自分たちのごみを自宅に持ち帰り分類した上で処分する。サラリーマンは常に身なりがしっかりしていて礼儀正しく他人に接する。2030年には中国のGDPはアメリカを追い越し世界一になると思われるが、日本の様な文化的な国になるのにはあと何年の月日を要するのだろうか。世界各国の人が中国について話す時に、騒がしい、甘い汁を吸うことを好む、身勝手といった印象ではなく、中国は経済と科学技術の大国で、また文明的で責任感のある大国だと言ってもらえる日は来るのだら

うか。

ホストファミリーからのお話によると、日本のこうした文化も実現には紆余曲折を経たとのことで、以前は人々もごみへの細かな分類を面倒に思っていたが、1964年の東京オリンピックを契機として文化の道を歩み始めた。中国は中華民国時期においては民族としての責任感や荣誉感を有していたが、その後約100年の間、独立を果たした中国人は自国への関心を失い、自らが裕福になることに専念している。2012年、習主席は全国民が一定の生活水準を実現すると同時に、強大で、民主的、文化的そして団結力のある国を構築し、その文化により世界から認められるための社会主義核心価値観を提起している。

大学名：北京語言大学

氏名：張一帆

テーマ：1.国民性についての理解

3.マナーのよさと思いやり

日本を訪れる以前、私は日本人の「残業文化」を理解できず、すべての日本企業には長時間の残業があると思っていた。また、時折必要以上に相手を敬遠する理由、それ以上に日本の大学における学術や生活面の状況についても知らなかった。

こうした問題について、今の私にはその理由が分かっている。

自分の仕事が終わった後に多少居残り仕事を終えていない同僚を手伝う、これは自発的な「残業」であり、大多数の日本人の「残業」はこれに当てはまる。これはある日本の友人から聞いた話である。中国人にはこうした考え方がないため、日本社会に関わったことのない中国人にとっては確かに理解し難いことであると言える。だが、もし自分が仕事を終えていない立場だったら、誰かに少しでも手伝ってほしいと思わないだろうか。日本人の考え方において各個人は全体の中の個人であり、当たり前のように周りの人を自発的に手助けする。そして彼らは人当たりもとても良く礼儀正しい。また夫婦間でも「ありがとう」や「どうぞ」といった言葉を使う。中国人として私たちが祖先から伝わる「相敬如賓(夫婦が互いを客人のように尊敬する)」の精神を忘れてはならない。私たちは多くの王朝による文化の入れ替わりを経験しているため、次第に古くからの美德や訓戒を失っているが、日本では「ありがとう」の言葉は頻繁に耳にするなどすでに日本人の生活の一部となっている。日本ではこうした他人への尊重や思いやりといった美德がしっかりと受け継がれており、日本の大学では東洋や西洋の文化、古くからの美德や進んだ思想がうまく融合されている。学生は言論の自由があり、自分の意見をそのまま表現できる他、教授らも学生からの問題提起を推奨している一方で、教授と学生、学生同士、教授同士の関係も尊重という美德が保たれている。

私個人として最も印象深かったのは、日本人の環境や自然への畏敬や保護の精神である。

大学名：北京語言大学

氏名：何沛霖

テーマ：3.マナーのよさと思いやり

4.日中間の交流

中国と日本の交流は決して抽象的な事柄ではなく、私たちの今回の訪日活動のあらゆる場面に表れている。

日本人との触れ合いの中では、皆が同じような顔立ちをしていることから私は国籍の違いというものを常々忘れてい

た。特に日本の学生との交流の際は皆の考え方などは大きな違いはなく、日本語を話すことを除き同年代の人との交流という認識で、外国人と交流しているという考えはなかった。

また日本人との交流では、私たちの間にあった一部の誤解や偏見といったものも無くなった。これまでは授業などで日本社会をテーマとした討論をしたことがあったが、そうした時でも自分がインターネットや教科書などを通じて知り得た日本について話すことしかできなかったが、今回実際に交流をし、そうした情報に間違いがあったことに気が付いた。

例えば、私は従来日本語の言語体系は複雑で敬語も長つたらしいと思っていたが、今回日本で丁寧な接客態度を目にしたり、日本人と交流をしたりといったことを通じて、相手を敬うために使ったり、自分が尊重されていると相手に思わせたりすることができる敬語はとても必要なものであると思った。またこうした敬語は自らの心にある相手への思いをうまく相手に伝えることができる。これは中国語では実現が難しいものである。多くの人が日本人はあまり感情を表に出さないと考えているが、中国人は自らの心にある感情や他人への尊重といったものを表現することを日本人に学ぶべきだと思う。

私たちは自らが勝手に想像する相手への印象を鵜呑みにしがちなため誤解や偏見は存在するが、交流や意思疎通を図ることでそれらは解消され互いに理解し合うことができるのである。

大学名： 首都医科大学

氏 名： 余夢潔

テーマ： 1.国民性についての理解

3.マナーのよさと思いやり

8日間の日本訪問が終わり改めて振り返ってみると、いくつかの言葉や出来事がとても強く印象に残っている。

まず最も印象的な言葉は「Thank you for waiting(お待たせしました)」で、ホストファミリーが私を彼らの自宅に案内するその途中に、お子さんを連れてトイレに行ったホストファザーが戻ってくる際に私に「Thank you for waiting」と声を掛けてくれたのである。こうした言葉は初めて耳にするもので、その時は多少気恥ずかしかったが、それからの数日間、私は頻繁にこの言葉を耳にし、ホテルでエレベーターを待っていた際もエレベーターが到着するとスタッフから「Thank you for waiting」と声を掛けられた。日本人は常に感謝の気持ちを持っており、サービスへの感謝、同行への感謝、提供への感謝をしている。これには私の考え方も次第に変わり、従来のようにサービスを当たり前と思うのではなく、周りの人に「ありがとう」と言うようになった。

もう一つ頻繁に耳にした言葉はホストファザーの口癖である「はい、はい」という言葉であった。私が何かを話す際、彼は自分の手を休め真剣に私の話を聞きながら「はい、はい」と口にしていった。それと比べ私が彼の話聞く際は少し頷く程度で積極的な反応はしていなかった。ホストファザーのこの口癖からは私への尊重や賛同、真摯な態度といったものを感じることができた。

今回の8日間で私たちは企業や学校そして家庭といったものから様々なディテールを集め私たち自身の心のうちの日本を構築した。私が体感したのはマナーに優れ、謙虚で礼儀正しい日本であった。私はこうした日本を心に留めて今後の人生における師とし、他人への感謝や尊重というものを身に付けたいと思う。

大学名： 首都医科大学

氏 名： 孫立瑩

テーマ：1.国民性についての理解

3.マナーのよさと思いやり

5.アニメなどのソフトパワー

マナーの重視、綺麗な環境、企業制度といったもの以上に私は今回のホームステイの際にとっても印象深かった秋葉原での出来事について語ってみたい。

私自身がアニメ好きでよくアニメ作品を見る他、今回友人からフィギュアの購入を頼まれていたため、ホストファミリーから行きたい場所を聞かれた私はオタクの聖地である秋葉原と答えた。私のホストファミリーは年配のご夫婦で、彼らの娘さんはすでに嫁いでいた。私は彼らにとってアニメ文化は縁のないものだろうと思い、内心あまり期待はしていなかった。

しかし何とホストマザーは秋葉原で勤めている甥御さんに連絡し、その後ホストファザーと甥御さんが私をメイド喫茶や大型のアニメ関連グッズのお店に連れて行ってくれた。メイド喫茶の店内ではメイドさんと一緒に行うパフォーマンスがあり、ホストファザーはその内容を中国語に訳して教えてくれた他、メイドさんもわざわざ中国語を使ってくれた。アニメ関連グッズの店内ではホストファザーがわざわざ中国語ができる店員を見つけフィギュアの紹介をしてもらうなど、こうした優しさや他人への思いやりはすでに日本の国民性的一部分として大和民族に浸透していると思った。

それからもう一つ、私がこうしたオタク文化の体験をしている時、ホストファミリーは中国の父兄とは異なり蔑むような態度はまったくとっていなかった。彼らはこうしたものを好きなことは悪いことではなく、音楽や映画が好きであることと同様にとらえている。これも寛容さという日本文化における特徴の一つだと言える。

自然と現代、都市と農村、人と人、伝統文化と西洋文化、日本は様々な方面の長所を取り入れ自分たちの独特の文化を作り上げた。中国は日本のように文化的な寛容さを学ぶことはできるだろうか。

大学名：首都医科大学

氏名：蓋峰

テーマ：5.アニメなどのソフトパワー

私の日本に対する知識と言えば、そのほとんどが日本のアニメに関するものであった。こうした点は、ソフトパワーはその普及において非常に大きな優位性を持っていることを表している。今回の日本での交流活動において、私はホストファミリーの同行の下で秋葉原を訪れたが、そこでのアニメ産業体系の発達ぶりからは、アニメの年齢や職業を問わない浸透度合の他、社会の様々な分野での応用といった一種のシンボリック的存在としての独特の魅力を感じることができた。

日本のアニメ関連グッズはハンドバッグやキーホルダーなど様々な種類があり、日々の生活の中で幅広く応用され、その影響力を高めている。また商業活動やサービス業などにおいてもアニメキャラクターの起用によりそのユニークさを高めている。以上が私の日本のアニメというソフトパワーへの認識である。

三井住友銀行は私たち訪日団を出迎える際に、カエルをイメージしたシールを使い企業イメージとしての親しみやすさを高めていた。

大学名：首都医科大学

氏名：林慧欣

テーマ：3.マナーのよさと思いやり

6.今後ますます中国でニーズが高まる技術

今回の訪日活動は私にとって初めて祖国を離れ、異なる民族の文化の多様性や異国の状況を体験できた活動であった。実際には日本と中国とは共通点の方が多いが、その中でも異なる点は私たちに啓発をもたらすものである。以下、何点かの出来事を通じて私が目にした日本について紹介していく。

一つめは礼儀である。日本で過ごした8日間では、私が触れ合ったすべてのサービススタッフ、店員、ホテルのマネージャー、運転手といった人々は常に笑顔で、さらに「すみません」という言葉を口にしていて。訪日団の多くの団員は私と同様に彼らから尊重というものを感じたが、私はさらに長い間感じることもなかった誠実さと寛容さを感じた。住友商事での懇親会においてある中国人従業員から、日本のサービス業に関わる人々は常に笑顔だが、実際には大きな圧力を抱えているという話を聞いた。日本人は愚痴や負のエネルギーを他人に伝えることを嫌っており、この点は彼らの他人に迷惑をかけないという自立式の教育と大きな関係があると私はこの時思った。

二つめは文化である。私のホストファミリーの一員である12歳の娘さんは5年間茶道を習っていた。茶道は中国において唐の時代以前に生まれたもので、南宋の時代に日本へ伝えられた。しかし今日では、中国において茶道を学ぶ人は非常に限られており、反面日本では茶道を貴重な存在として受け継いでいる人が沢山いる。こうした現状は、中国における王朝の交替により一部の文化が失われたことに起因していると思われる。幸いここ数年、伝統文化の継承については華服節の開催など次第に多くの中国人が重視し始めている。

三つめは堅持である。日本の京セラ(60年)、三井住友銀行(4世紀)といった長い歴史を持つ企業にはそれぞれ長寿の秘訣があるが、それは堅持である。稲盛和夫氏がオイルショック当時の最も困難な時期に人員削減をすることなくその危機を乗り越えることを諦めなかったことが、今日のフォーチュン・グローバル500の京セラの形成に繋がっている。対して一部の中国の国有企業の寿命が短いその主な理由は、利益が望めなければ直接それを放棄するという「投機主義」にある。実際にはこれは堅持と融通の問題である。私は、企業の形式、戦略、プロジェクト、製品などは状況に対応するために融通をきかせても良いが、理念というものは堅持しなければならないと思う。

以上が今回の訪日において印象深かったものである。いずれにしても今日の日本には私たちが学ぶべき多くのものが存在しているが、中国としても例えば私たちが日常使用するAlipay、WeChatなどの決済方式といった一部の分野においては、独自の優位性を有している。互いに学び合うことで私たちは共に成長することができる。今回私たちは日本の友人たちと連絡先を交換した。これからも連絡を取り合い、相互理解を深めたいと思う。

大学名： 首都医科大学

氏名： 欧雯欣

テーマ：2.集団帰属意識の強さ

3.マナーのよさと思いやり

短かった訪日の旅も終わり、これまで日本を訪れたことが無かった私は今回の経験を通じてメディアが言うのとは異なる新たな日本について知り、これまで以上にこの学ぶことに長けた日本という国をより知りたいと思うようになった。

今回の訪問では多くの日本企業を見学し、沢山の金融面の知識を得ることができた。そして日本企業は日中両国の文化的違いを非常に反映していると思った。日本企業は一般的に歴史が長く、100年以上の歴史を持つ企業の比率は世界でも一、二を争う。また長い歴史を有する企業もしくはブランドの多くは支店をあちこちに開くといった事業の大規模な拡張はせず、自らの店舗をより優れたものにするに専念している。こうした根気もしくはひたむきさというものは私たちが学ぶべきものだと思う。また日本企業は集団帰属意識が強く、彼らは日本の経済や社会への影響よりも

全世界ひいては全人類への影響というものを重視しており、私たちが学ぶべきものである。

また同時に、今回の訪問の過程、特に企業やホストファミリーとの触れ合いを通じ私は、日本国民のマナーは幼い頃からしっかりと育まれていることを知った。例えば毎回企業の見学を終えその場を離れる際には従業員の皆さんが視界から姿が消えるまで手を振ってお別れをしてくれたが、こうした光景は中国ではほとんど見ることはないものであった。ホストファミリーのお子さんは1日で「ありがとう」の言葉を何十回も口にする。他人に対してであれ、また家族に対してであれ、こうした礼儀の育成は素晴らしい文化の継承であり、周囲の人に素養が高いという印象を与えると同時に日本という国に対する好感度も高めることができる。

わずか8日間の訪日の旅では日本のすべてを理解することはできないが、マクロ的に日中両国の違いや私たちが日本に学ぶべき点を知ることができた。すべての真理は実践を経て生み出される。将来改めて日本を訪れ、東アジア民族としての日本をより深く知りたいと思っている。

大学名： 外交学院

氏 名： 範伯陽

テーマ： 1.国民性についての理解

3.マナーのよさと思いやり

私はかつて一時期自治体国際化協会で実習をしたことがあったが、その際最も印象深かったのは日本人の時間への正確さであった。彼らは常に恐ろしいほど正確に午後1時(規定の業務開始時間)にオフィスに入る。こうした点は彼らの長年の実践や習慣によるもので、最終的に一種のルールとなったと私は思っている。傍観者の立場であるが、こうした部分について以下に述べたいと思う。

日本は非常にルールを重んじる国であり、時間への正確さも一つの重要なルールである。もし単純に何事も事前の計画通り行わなければならないとすれば、古臭い概念にとらわれ、融通が利かないという印象を与えるが、実際にはほとんどの状況において時間に正確な方が有利になる。時間に正確であることは、つまりより多くの時間を対策の制定や突発的事件への対応に充てることができる他、さらに他者に利便性をもたらす作業効率を高めることができる。一見すると時計の歯車のような生活で、皆が必死に生きているように見えるが、私はこれこそ生活の意義であり、社会人として守るべきルールだと思う。

大学名： 外交学院

氏 名： 盛悦

テーマ： 3.マナーのよさと思いやり

4.日中間の交流

日本人のマナーへの重視については多くの人を知っているが、実際に体験してから彼らのマナーの良さはすでに習慣となり浸透していることに気が付いた。日々の「おはようございます」や「ありがとうございます」といった言葉は口癖のようになっている。ホストファミリーは私にとっても配慮してくれた。北京語言大学の団員の話には、彼女とホストファミリーの女の子が買い物に出かけた際、女の子が着替えを終えると真っ先に彼女に待っていたことへの感謝を述べたといった内容があった。こうした些細な出来事は私たちが自身を見つめ直すのに足るものであった。現在、私たちは多くの事柄について当然のものとしており、畏敬や感謝の心を失っている。

日中間の交流については、以前はメディアの報道で言われるような日中双方の外交や経済交流についての知識に限られ、民間交流の意義や形式などについては深い理解をしていなかった。しかし実際の体験を通じて、日中双方の人々の交流、心と心の交流があつてこそ相互理解が可能となり、両国の平和的で友好的な発展を推し進めることに繋がるのが分かった。企業の従業員からも、中国人として単身日本を訪れたが同僚から沢山のサポートをもらい、国籍の違いにより差別されることはないといった話があるなど、日中間の交流は民間においてひっそりと、だが大きな影響力をもって進められている。

学生たちの観た日本を通じて小さいものから大きいものを見ると、私たちが今後発見しさらに中国において広めるべき日本独特の優れた部分はまだ沢山あると言える。

大学名： 外交学院

氏名： 王思嘉

テーマ： 1.国民性についての理解

3.マナーのよさと思いやり

4.日中間の交流

今回の訪日において最もたくさん口にした言葉そして耳にした言葉は「ありがとう」であつた。

他者への感謝の気持ち、自然の恩恵への畏敬の気持ち、家族間の尊重、自分の事については最大限自分で行うこと、他人に迷惑をかけないことなどからはその国民性が表れている。

きれいな路地、細かく分類されたごみ、良好な治安などからは日本がとても規則正しい国であることが分かる。

ホストファミリーと過ごした短くも楽しかった1日半の時間では、私に対する深い思いやりを感じることができた。皆さんとても優しく、我が子のように私に接してくれて、私が洋服の試着をするときは待ってくれて、食事の際は私の食べたいものを一緒に食べてくれた。

日本の一流大学である京都大学と早稲田大学の学生との交流では、私たちが把握している日中両国の状況は彼らとは違うものであつたが、皆は何の偏見もなく、敏感な話題について論争することもなく、互いに相手の国の文化への尊重の気持ちを抱きつつ、友好的で活発な交流を行った。

一流企業が一流たる所以についても知ることができた。独特な企業文化、全人類の共同の幸福を中核とする経営理念、従業員の終身雇用制度などからは多くを考えさせられた。

お世話になった皆様、誠にありがとうございました。

大学名： 外交学院

氏名： 劉知雨

テーマ： 1.国民性についての理解

2.集団帰属意識の強さ

3.マナーのよさと思いやり

わずか1週間あまりの日本滞在であつたが、多くの感想が得られた。まず皆が日本に到着して最初に感じた日本人のマナーの良さである。中国では手を振ってお別れをするのは一つの形式上のものであるか、或いはお別れをするという象徴であるが、日本では手を振る動作はゲストへの尊敬、お別れをする相手への名残惜しさが込められたもので

ある。「手を振る」、「目送する」、「お辞儀をする」これら一見形式化した礼儀は、日本人が手を抜かず一つひとつ行うことで、一際礼儀正しく、見るものを感動させ、尊敬の気持ちを相手に伝える。子どもが親の手助けを受けた時には親に感謝を述べる、コンビニの店員がお客の一人ひとりに感謝を述べる、歩行者が強い日差しの下働いている駐車場のスタッフを見かけた際に「彼らは本当に大変だ」と思いやりの言葉を発するなど、日本人の「礼儀」は「親密ではない人」だけに限らず、赤の他人や最も親しい家族に対しても同様に用いられる。次に日本の国民性である。私が思うに日本の国民性には沢山の長所があり、主に自律的でルールを守ることと集団帰属意識に示されている。京都大学の教授のお話はとても印象的であった。同教授からは、例えば京都大学は独特で開放的な思想を重視している、日本の各都市にはそれぞれ特色があるといった、それぞれの「グループ」にはそれぞれの特徴がありそのルールを厳しく守っている。こうした「グループ」内の統一性は個人のみならず、学校や都市などをカバーしている、といったお話があった。また日本人の自律性やルールにも驚かされた。路地では清掃作業員やごみ箱を見かけないのにもかかわらずごみ一つなく、子どもですらアイスクリームの包み紙を指定のごみ箱に捨てていた。日本人の集団意識も明らかで、会社、故郷、住んでいる街に対する彼らの一挙手一投足からは集団意識における責任感が示されていた。ある時、渋谷駅のハチ公像の所でホストファザーが潰れたごみを見かけると何のためらいもなくそれを拾い、ごみ箱を見かけるまでそれを持っていたが、この行為にはとても驚かされた。